論　文

国絵図と古文書史料から読み解く江戸年間の宮古列島における松樹導入の歴史[*1]

安井　瞭[*2]・岡本　透[*3]・寺嶋芳江[*4,5]・奈良一秀[*2]

安井　瞭・岡本　透・寺嶋芳江・奈良一秀：**国絵図と古文書史料から読み解く江戸年間の宮古列島における松樹導入の歴史　九州森林研究 73：11 ー 16，2020**　国絵図とは徳川幕府により各藩の大名に作成を命じた絵図であり，琉球国においては正保・元禄・天保の各絵図が現存している。これらの絵図は植生やサンゴ礁など当時の島の様子を忠実に再現している。近年，絵図を用いて植生復元を試みる研究がなされているが，植生の変遷を詳細に把握するためには，複数の絵図を比較するだけではなく，古文書史料などとの比較を行い，資料性を高めることが必要であるとされている。本研究では，宮古列島におけるリュウキュウマツ（以下，松）の分布域の変遷を明らかにし，国絵図と古文書資料の資料性を高めることを目的として，国絵図と古文書資料の記載内容を照らし合わせ，江戸年間の宮古列島における人為的な持ち込みや造林による松林の変遷について検討した。その結果，古文書に記載されている宮古島における松の導入（1655年）や松を用いた造林拡大（18世紀～19世紀）などが国絵図に反映されていることが明らかになり，国絵図の資料性を高めることができた。

キーワード：絵図，琉球列島，リュウキュウマツ，杣山，宮古島

Ⅰ．はじめに

国絵図とは徳川幕府が各藩の領地と実情を把握することで国土全体の実情を把握することを目的として作成された「国土基本図」である。国絵図の制作に当たり徳川幕府は「国絵図仕様覚書書」を各藩の大名に発布し，絵図の様式や縮尺，更には植生や街道や村などの細かな点まで表現方法を統一させた上で幕府に絵図を献上させることを命じた（喜多，2003；和泉，2005）。

国絵図は慶長・寛永・正保・元禄・天保の５つの時代に作成された。元禄国絵図は正保国絵図を元に，天保国絵図は元禄国絵図を元に作成されたとしている（川村，1977；金城，1995）。また，薩摩藩では，宝暦年間に独自の国絵図を作成するなど，各藩独自の国絵図も存在する。

正保国絵図以降の国絵図は複数の異なる成立年代で統一した表現手法を用いており，江戸年間の当時の環境を反映した一般図としての性質を持っている。また，地図としての性格も持ち合わせていることから，造林された箇所の特定も可能である。このことから国絵図を用いて江戸年間における植生の変遷を比較検討する試みが1990年代より行われてきた（小野寺，1995；岡本・藤川，2013 a；2013 b）。小野寺（1995）は絵図に描かれた画像の解釈が植生復元に重要であるとし，岡本・藤川（2013 a；2013 b）は，単一の国絵図だけではなく，複数の国絵図と古文書などと比較をすることで絵図の資料性を高めることが可能であるとしている。

宮古列島を含む琉球王国は，1609年に薩摩藩の侵攻を受け（琉球侵攻），同藩の保護下に置かれたのちに，正保・元禄・宝暦・天保の各年間に絵図が作成された。制作過程の途中で作成された下絵図などは現存していないが，現存する４つの国絵図から琉球列島の島々を対象に火山の活動履歴を調べる研究（及川・中野，2008）や，サンゴ礁や干潟の変遷に関する研究（目崎・渡久地，2005）などが行われている。しかし，琉球列島においては造林・植生に焦点を当てた絵図研究は行われていない。

宮古列島においては多くの古文書史料が残存しており，これら古文書史料を用いた杣山（公有林）の形成史などの研究も行われている（砂川，2001）。

これらの古文書史料には樹木の導入，例えばリュウキュウマツ（以下　松）の導入や松を用いた造林などに関する記載もある。しかし，記録の一部は植林が行われてから100年以上経過してから記されたものも存在しており，正確性に乏しい。例えば，サツマイモの宮古島の伝来については白川氏家譜正統では1597年伝来とされているが，実際は1618年であり，サツマイモの伝来に関しては古文書の内容が誤りであるとされている（稲村，1957）。このように古文書の記載内容に関する信頼性にも疑問が残る。また松などの樹木に関する植栽箇所も曖昧な部分も多く場所の特定が困難な場合も多い。

また，宮古列島においては古文書の解読は行われているものの，林政学的な調査がされていない朝鮮王朝実録などの文献の存在が明らかになった。

朝鮮王朝実録は李氏朝鮮王朝が存在した519年間の記録を編纂した実録であり，その記録の一部に漂流者の記録がある。15世紀ごろの朝鮮王朝実録には済州島から朝鮮半島に向かう途中で遭難し，琉球列島の島々に漂着した漂流者による琉球列島の島々に関する記述があり，その中には植生に関する記録も存在する（池谷ほか，2005）。このような漂流者による植生の記録は国絵図が表現することができない15世紀の植生を反映している可能性があり，国絵図の内容を補完することにより正確な宮古列島の植生を復元することが可能であるかもしれない。

---

*1　Yasui, R., Okamoto, T., Terashima, Y., Nara, K. : The history of pine tree introduction to Miyako Islands during Edo era: evidence from Kuniezu and ancient writings.

*2　東京大学大学院新領域創成科学研究科　Grad. Sch. Frontier Sci., The Univ. of Tokyo, Kashiwa 277-8561, Japan
*3　森林総合研究所関西支所　Kansai Res. Ctr., For. & Forest Prod. Res. Inst., Kyoto 612-0855 , Japan
*4　琉球大学熱帯圏研究センター Tropical Biosphere Res. Ctr., Univ. of the Ryukyus, Nishihara 903-0213, Japan
*5　静岡大学イノベーション社会連携推進機構　Org., Innovation and Social Collaboration, Shizuoka Univ., Shizuoka 422-8529, Japan

国絵図は作成開始から幕府に提出するまでに長いものでも3年程度とその当時の松林の状況をリアルタイムに表している。また，地図としての性格も持ち合わせていることから，造林された箇所の特定が可能あり，更には松のような樹種判別の容易な樹木については人為的な持ち込みによる分布域の変遷が明らかにできる可能性がある。

小野寺（1995）は国絵図を用いて植生表現の復元を行う際には絵図に描かれた画像の解釈が重要であるとし，岡本・藤川（2013 a；2013 b）が行った先行研究では，過去の植生の変遷を詳細に把握するためには，単一の国絵図だけではなく，複数の国絵図と古文書などとの比較をすることで絵図の資料性を高めることが可能であるとしている。そのため，宮古列島の島々でも国絵図と古文書資料を組み合わせて検討することにより，国絵図に描かれた画像の解釈をすることが可能になり，国絵図に描かれる植生表現から江戸年間における宮古列島の松林の発達史をより正確に復元できると考えられる。

そこで本研究では，宮古列島における松の分布域の変遷を明らかにし，国絵図と古文書資料の資料性を高めることを目的として，国絵図と古文書資料の記載内容を照らし合わせ，江戸年間の宮古列島における人為的な持ち込みや造林による松林の変遷について検討した。

Ⅱ．調査地と研究手法

1. 調査地の概要

宮古列島は8つの有人島とその周囲に位置する無人島から構成される。主な有人島は宮古島（158.9 km^2），伊良部島（29.1 km^2），多良間島（19.8 km^2），下地島（9.7 km^2）である。宮古列島が含まれる宮古地域は森林率が17.9％と沖縄県平均の46.9％を大きく下回り（沖縄県総務部宮古事務所，2019）森林が少ない地域とされる。

宮古列島，特に宮古島は14世紀ごろから中山国に朝貢をしていた記録が残る。1609年の薩摩藩による侵攻の後は，薩摩藩統治下の琉球王国に属することになった。薩摩藩下では検地が行われたほか，琉球王国から三士官（親方）が複数回派遣され，当時の宮古列島における造林や農業などの実情を見聞きし，関連法案の改正などを行っていた（琉球王国，1745）。

2. 国絵図の調査手法

本研究では，正保琉球国八重山絵図，正保琉球国首里城絵図，元禄琉球国八重山絵図，宝暦年度琉球国八重山絵図，天保琉球国八重山絵図を用いた。特筆すべき場合を除いてそれぞれ正保国絵図，正保城絵図，元禄国絵図，宝暦国絵図，天保国絵図と表記する。

本研究では国絵図を直接目視することで国絵図中に描かれている樹形から松を認定し，国土地理院（2019）が発行している2万5000分の1の地理院地図上に松林の位置をポリゴン化したものを投影した。国絵図中に表現されている松の樹形の認定には小野寺（1995），小椋（2012），岡本・藤川（2013 a；2013 b）が植生表現を検討した国絵図や下絵図，屏風絵など様々な絵図の松の表現手法と比較した上で松と認定を行った。

正保国絵図とは，幕府から1644年（寛永21年）に地図の提出を命じられた薩摩藩が1649年に完成させたものである。この国絵図の元となった2つの絵図帳は1696年の鹿児島鶴丸城火災に伴い焼失してしまった。そこで，同年に薩摩藩が幕府に願い出て国絵図を書き写したものが，現存する唯一の正保国絵図である。原本となった幕府所蔵の正保国絵図も紛失している（沖縄県教育委員会，1992；国絵図研究会，2005）。

正保城絵図は幕府の命令を受けた薩摩藩が，正保国絵図と同時期，同一絵師，同一規格により作成した首里城周辺に関する絵図である。正保国絵図と同様，1696年の鹿児島鶴丸城火災に伴い焼失してしまい，現在現存しているものは薩摩藩による写しである（沖縄県教育委員会，1992）。

元禄国絵図は，1697年（元禄10年）に幕府の命令を受けた薩摩藩が，正保国絵図を基準として領地内の正保年間以降の変動箇所を反映させ，1702年に完成させた国絵図である（川村，1977；沖縄県教育委員会，1993；国絵図研究会，2005）。

宝暦国絵図は，元禄国絵図を元に1756年（宝暦6年）より作成が開始された国絵図である。この国絵図は，薩摩藩による元文年間の検地（1737年～1750年）の記録を基に作成が行われたものであり，薩摩藩が独自に作った国絵図である（長間，1992）。

天保国絵図は，1831年（天保2年）に幕府から石高変化などの郷帳改定の命令をされた薩摩藩によって，郷帳改定と共に作成されたものである（沖縄県教育委員会，1994；国絵図研究会，2005）。

正保国絵図と正保城絵図の解析には沖縄県教育委員会が編纂した「正保琉球国絵図 宮古島・八重山島」を用いた。絵図の画像が不鮮明で樹形の判別が困難な場合では「深層畳み込みニューラルネットワークによる二次元画像のための超解像システム（Dong *et al.*，2015）」を用いた画像解析ソフト Waifu 2 X を用いて画質を向上し，樹形の判別を行った。

元禄国絵図と天保国絵図は国立公文書館に所蔵されている。また，国立公文書館のデジタルアーカイブでは，元禄・天保の両国絵図の公開が行われており，高解像度の画像を web 上で閲覧することが可能である（国立公文書館，2015）。本研究では，このデジタルアーカイブを拡大し樹形の解析を行った。

宝暦国絵図は国立公文書館に所蔵されている。本研究では，原本を直接観察することにより樹形の確認を行い，解析を行った。

3. 古文書の概要と調査手法

「朝鮮王朝実録[注1]」，「白川氏家譜正統」，「宮古旧記御嶽由来記[注2]」3つの古文書史料を読み解き，宮古列島の植生や造林事業にまつわる記録を抽出し，松の有無や松林の造林状況などを分析し，国絵図調査の結果と照らし合わせた。

朝鮮王朝実録は李氏朝鮮の初代国王である太祖から純宗に至るまでの519年間の記録を編纂した実録である。内容は朝鮮王朝時代の軍事・外交など多岐にわたるが，琉球王国の島々に漂着した者たちの「漂流記」が収録されている。原文は漢文で記述されている。本研究では池谷ほか（2005）が漢文を書き下し文へと翻訳を行ったものを自身で現代語訳を行ったものを利用した。

白川氏家譜正統は宮古島の氏族である白川氏の初代恵源から，現在に至るまでの各白川家当主の功績を記した家譜である。砂川（2001）により，白川氏一族による松林造成に関する史料がまとめられている。原文は主に和文で書かれているが，一部箇所には

漢文による記述箇所も見受けられる。本研究では，砂川（2001）が現代語訳した文章を一部改変して利用した。

宮古旧記御嶽由来記は首里王府の命令を受けて編纂された「宮古島旧記」に関連する史料を仲原善忠氏が1898年に筆写し，再編纂したものである。1705年編纂の「御嶽由来記」をはじめとして，サツマイモや松の伝来など宮古島の古文書史料が数多く記されている。文章は主に和文で書かれている。本研究では，仲原（1898）が筆写したものを自身で現代語訳を行ったものを利用した。

Ⅲ．国絵図の調査結果

1. 正保国絵図

沖縄島の首里の松川地区に存在する石碑「官松嶺記」よると，この地区では1497年に当時の国王である尚真によって松1000本が植栽されたとある。そこで，正保城絵図の首里地区に描かれた樹形を松（図1a）と判断した。また，松が自然分布している悪鬼縄島（沖縄島）北部にも同様の樹形が描かれている（図1b）。いずれも，樹形は朱色の幹と横長の楕円形の緑で表現されており，その特徴は小野寺（1995）や岡本・藤川（2013a；2013b）の国絵図，小椋（1992；2008；2012）による絵図類の検討と一致するのである。この樹形描写を松の基準とし，宮古列島の国絵図を確認したこところ，描かれている樹木はいずれも松とは異なり，松は分布していないと判断した。

2. 元禄国絵図

元禄国絵図では，仲原（1898）と砂川（2001）の研究により松の存在が示唆されている宮古島の大野山に描かれた樹形を松の基準とした。元禄国絵図では，複数の樹木が簡略化されて描かれている。松の枝葉は筆を横に流すようにして描かれており，丸く点状に表現された広葉樹の枝葉とは明確に区別できる（図2a）。また，松と類似する樹形でも，気根が描かれている場合はガジュマルやアコウなどの樹木であると判断した。この基準を適用すると，松は宮古島の大野山付近のほか，洲鎌付近と城辺長間付近に確認することができた（図3）。そのうち，洲鎌，長間（図2b）付近の松は非常に小さく，稚樹であると判断した。同様な樹形は多良間島でも確認された（図3c）。伊良部島・下地島・その他の島では，松に似たガジュマルのような樹木は描かれているが，松は描かれていない。また，池間島や大神島，来間島，水納島といった小離島では，樹木は描かれていない。

3. 宝暦国絵図

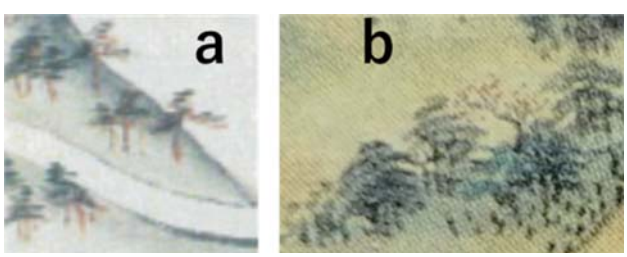
宝暦国絵図の樹形は，基本的には元禄国絵図に準じた描き方となっている（図4）。松の樹形を確認できるのは，宮古島では百名村（城辺保良）（図4b），中きや泊村（城辺友利），宮國村（洲鎌），平良，大野山（図4a），野国山，島尻，伊良部島（図4c）では島のいたるところに，下地島では北部と南部の海岸に，多良間島では南部の海岸に，松の樹形が確認された（図5）。

元禄国絵図では，矮小だった洲鎌や長間付近，多良間島の松林も成長して大きくなっていることが確認された（図4）。更に，宮古列島の島々では，元禄国絵図では描かれていた広葉樹をあまり見ることができない。

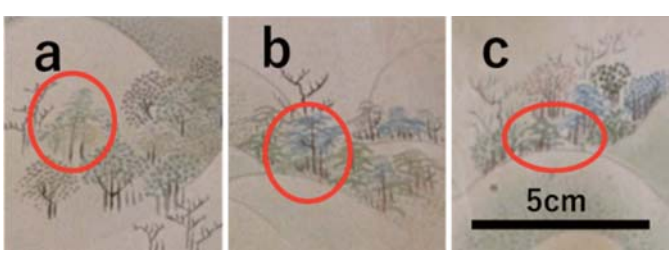
4. 天保国絵図

樹形は他の国絵図と比較するとさらに簡略化が進んでいる。（図6）。

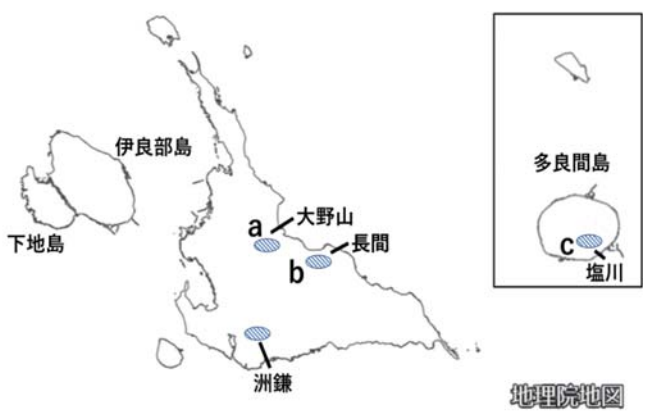
宮古島では，百名村（城辺保良），宮國村（洲鎌），荒里村，友



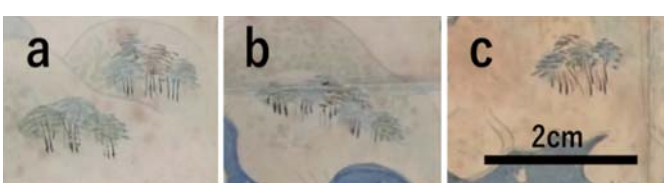
図－1.（a）正保城絵図（写）に表現されている松，（b）正保国絵図（写）の松（首里）
資料：東京大学史料編纂所所蔵　正保琉球国絵図八重山島



図－2. 宮古島大野山で確認された松（a），同島長間の松稚樹（b），多良間島の松稚樹（c）図中の赤丸で示した箇所
注：いずれも縦約7cm×横約6cm。
資料：国立公文書館所蔵　元禄国絵図琉球国八重山島

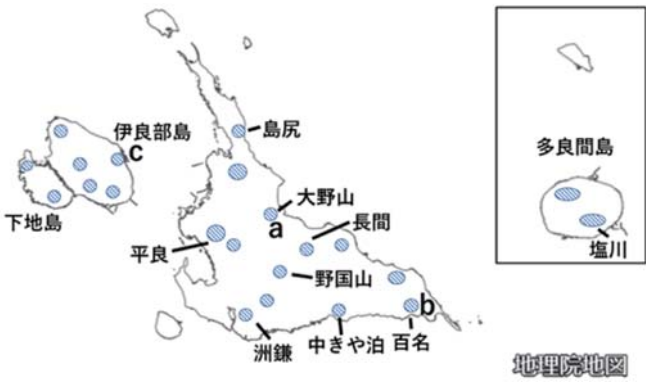


図－3. 元禄国絵図に確認された松の分布域
注：松分布域は青の斜線部分。
注2：図中のa，b，cの符号は図2で示した松林の位置を示す。
資料：国土地理院（2019）

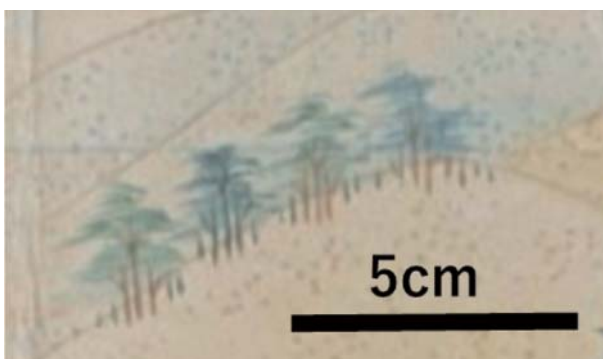


図－4. 宮古島大野山で確認された松（a），同島百名の松稚樹（b），伊良部島の松（c）
注：いずれも縦約2cm×横3cm。
資料：国立公文書館所蔵　宝暦国絵図琉球国八重山島

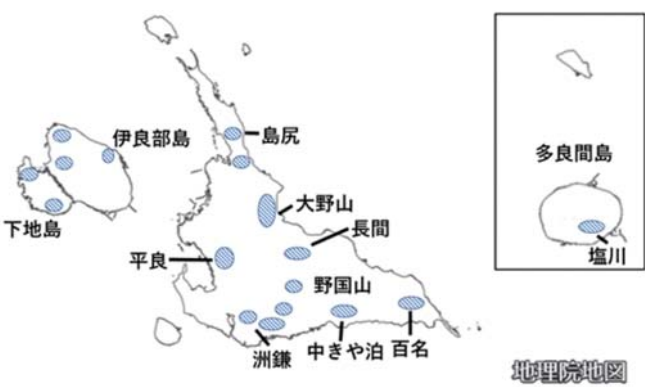
利村（城辺友利），中きや泊（城辺友利），大野山，野国山，島尻，平良，伊良部島では伊良部島中部・北部・東部沿岸部に，下地島では南部沿岸部と北部沿岸部に，多良間島では塩川にそれぞれ松林が確認された。



図－5.　宝暦国絵図の国絵図に確認された松の分布域
注：松分布域は青の斜線部分。
注2：図中のa，b，cの符号は図4で示した松林の位置を示す。
資料：国土地理院（2019）



図－6.　天保国絵図（宮古島大野山における松林）
注：縦約6 cm ×横約10 cm。
資料：国立公文書館所蔵　天保国絵図琉球国八重山島



図－7.　天保国絵図に確認された松の分布域
注：松分布域は青の斜線部分。
資料：国土地理院（2019）

Ⅳ．古文書史料の調査結果

1.　朝鮮王朝実録

多良間島に関する記述

一.　材木は無い。あるいは所乃島（西表島祖納）より取ってきたり，伊羅夫是麼（伊良部島）より取ってきたりする。また，果木もない。

伊良部島に関する記述

一.　櫻（シュロ）・桑・竹がある。たくさんの材木がある。

宮古島に関する記述

一.　櫻・桑・竹がある。山に雑木は多いが，島民はその名前を知らない。

首里（沖縄島）に関する記述

一.　松・櫻・桑・竹がある。その他の雑木の名前は不明である。

2.　白川氏家譜正統

白川氏十世下地親雲上恵根

1655年　琉球滞在中に小松数株を求め得て宮古島の土壌の宜しきところを選んで試植をした。（中略）宮古本島には松樹が無く，造船の木材を欠いている。恵根は密かに思い及び，特に松樹を求めて本島に松樹を植えた。今大武山に松樹が5株・島尻後に1株あり，高木となっている。島に松樹が有るのはこれより始まる。

1681年　小松2000本を要請し宮古本島に持ち帰って洲鎌村の土壌の宜しき所を選んでこれを植えた。今に至って繁茂いたし本島の用材及び他国船の橋帆桁・船板などにこれを用いている。宮古本島の松林はこれより始まる。

白川氏十二世平良大首里大屋子恵治

1715年　造成した杣山面積。

一.　松敷地8160坪　野国山・大野山

一.　諸木敷地63940坪　村数に応じて8か所にこれを造成した。

白川氏十三世平良大首里屋子恵通

1742年　王府（首里）に要請して，杣山筆者18人の兼務で，村垣・海垣・御嶽・竹山・蘇鉄山を設立。勤務中に造成した松・諸木の造成面積を左に記す。

一.　大皆粉地（宮古島）松敷地　80000坪

一.　大武山（宮古島）　松敷地　68420坪

一.　箕隅（宮古島）　松敷地　1500坪

一.　大嶺（宮古島）　松敷地　4800坪

一.　長山（伊良部島）　松敷地　230坪

3.　宮古旧記御嶽由来記

白川氏下地親雲上恵根松樹植る。

白川氏下地親雲上恵根は紀元二千三百十五年明暦元年六月（1655年）貢物を捧げて中山に到着した。同年九月小松数株を求めて宮古島に帰島し大武山及び島尻後ろに試しに植え，現在，生い茂っている。其後二十六年紀元二千三百四十一年天和〇年四月（1681年）貢物を捧げて中山に到着し，この時第二十八代尚貞王に奏請して松小木二千本を持ち帰り，下地村洲鎌に植えた。これより松林が始まると伝えられている。

Ⅴ．考察

1．国絵図と古文書から読み解く宮古列島における松林の変遷

表 1 は国絵図と古文書史料から松の導入や造林に関する記述をまとめたものである。

李氏朝鮮王朝の漂流者の記録では，沖縄島の首里において「松」への言及がある。一方，宮古列島の島々においては，材木や桑，シュロに関する記述は存在するものの，「松」の記述は一切ない。また，同じ漂流者の記録では「宮古島では樹木が少なく西表島の祖納まで樹木の採取に出かけていた」という記述がある。また，1644 年作成の正保国絵図でも，松の樹形を宮古列島では確認できなかった。以上から総合的に考えると，15 世紀～16 世紀の宮古列島には松が存在していなかったと強く示唆される。

1697 年作成の元禄国絵図には宮古島と多良間島にいくつかの松の樹形を見ることができる。白川氏家譜正統・宮古旧記御嶽由来記にも，1655 年に白川氏十世恵根によって松の苗が宮古島に持ち込まれ，植栽されたという記述があり，元禄国絵図上に松の樹形が描かれた箇所とも対応する。このことから，宮古島の松は 1655 年に植栽されたものが起源である可能性が高い。多良間島については，同時代の松導入に関する記録は残ってはいないものの，元禄国絵図に稚樹状の松の樹形が描かれていることから判断すると同年代に植栽されたものが最初ではないかと考えられる。

1756 年作成の宝暦国絵図では，宮古島・多良間島の他に伊良部島でも新たに松の樹形を確認することができる。白川氏家譜正統にも 1742 年に長山（伊良部島）で松林を造成したという記録が残っており，こちらも確かに古文書史料と国絵図の記載が一致する。伊良部島は朝鮮王朝実録では「材木あり」と書かれているが，首里のように「松」とは明記されていないことからこの「材木」とは松以外の樹木であると考えられる。このことより，伊良部島は白川氏家譜正統に記述がある 1742 年に松が持ち込まれたと推定することができる。

このように国絵図と古文書資料の記載内容を照らし合わせることで宮古列島においては元来松が分布していない島に人為的に松が持ち込まれ，松の分布域が拡大したことが判明した。

2．国絵図の資料性

元禄国絵図で松が確認された宮古島の洲鎌・大野山，多良間島の塩川の松は，宝暦国絵図では百名村といった 1700 年代初頭に植栽が行われた他の松よりも大きく描かれている（図 6）。このことから，国絵図は江戸年間の宮古列島において，松で主に構成される森林の状況を正確に反映していることが示唆される。

以上のように，正保・元禄・宝暦・天保の各国絵図と古文書の記載内容を照らし合わせることにより，宮古列島における松の導入について明らかにすることができた。古文書史料に記載のない地域においても，国絵図を使うことにより松の導入場所を推定できるため，松のような樹種判別の容易な森林植生の復元には国絵図が極めて有用であると考えられる。このように年代の異なる国絵図の描写の違いに着目して植生の変化に着目した研究は行われておらず，宮古列島のみならず他の地域でも国絵図を比較することで江戸年間における植生の変化について明らかにすることができるかもしれない。

琉球列島は過去の海進期における海没履歴の無い高島と，海進期などに海没した低島で構成されている。松は西表島や沖縄島といった高島には自然分布しているが，低島のものは人によって導入されたものである可能性が高い。宮古列島以外の低島にも松は広く導入されており，その導入時期や松林の成長について今回の手法を適用することで明らかにすることも可能であろう。

文末脚注

注 1．朝鮮王朝実録は池谷ほか（2005）が原本から各下し文へと改めたものを著者が現代語訳へと翻訳を行った。

注 2．宮古旧記御嶽由来記は仲原（1898）が記した原本を著者が現代語訳へと翻訳を行った。

謝辞

本研究におきまして沖縄県公文書館，那覇市歴史博物館，東京大学農学研究科芳賀助教・古井戸教授，Dr. ゴン診療所の泰川恵吾先生をはじめ多くの方々のご協力，ご助言をいただきました。

表－1．国絵図と古文書に記載されている松の記録

年代（西暦）	宮古島	伊良部島	下地島	多良間島	首里	出典
1479年	×	×	×	×	○	朝鮮王朝実録
1645年	×	×	×	×	○	正保国絵図
1655年	○	×	×	×	○	白川氏家譜正統 宮古島旧記御嶽由来記
1681年	小松2000本を洲鎌村に植えた。					白川氏家譜正統 宮古島旧記御嶽由来記
1697年	○	×	×	○	○	元禄国絵図
1715年	野田山・大武山・諸敷地に松林を造成					白川氏家譜正統
1742年	宮古島・伊良部島に松林を造成					白川氏家譜正統
1756年	○	○	○	○	○	宝暦国絵図
1831年	○	○	○	○	○	天保国絵図

注：図中の○は松についての記述，もしくは松が描かれていることを示す。
　　×は松に関する記述，松が描かれていないことを示す。

引用文献

Dong, C. *et al.*（2015）arXiv, 1501：1–14

稲村賢敷（1957）宮古島庶民史，511 pp

和泉清司（2005）地域政策研究 8：1–19

池谷望子ほか（2005）朝鮮王朝実録　琉球史料集成，490 pp　榕樹書林，沖縄

川村博忠（1977）人文地理 29：28–54

金城善（1995）沖縄県史研究紀要 1：43–74

喜多祐子（2003）人文地理 55：46–64

国土地理院（2019）地理院地図（電子国土 Web）URL: https://maps.gsi.go.jp（2019 年 10 月 4 日利用）

国立公文書館（2015）国立公文書館デジタルアーカイブ　URL: https://www.digital.archives.go.jp/（2019 年 10 月 14 日利用）

国絵図研究会（2005）国絵図の世界，408 pp，柏書房，東京

目崎茂和・渡久地健（2005）地図 43：66–67

長間安彦（1992）浦添市立博物館紀要 4：35–36

仲原善忠（1898）宮古島旧記御嶽由来記，109 pp

小椋純一（1992）絵図から読み解く人と景観の歴史，238 pp，雄山閣出版，東京

小椋純一（2008）国立歴史民俗博物館研究報告 148：379–412

小椋純一（2012）森と草原の歴史　日本の植生景観はどのように移り変わってきたのか，343 pp，古今書院，東京

及川輝樹・中野 俊（2008）日本地球惑星科学連合 2008 年大会予稿集（CD-ROM），V 151-P 001

岡本透・藤川将之（2013 a）洞窟学雑誌 37：1–20

岡本透・藤川将之（2013 b）地球 35：577–584

沖縄県教育委員会（1992）琉球国絵図史料集　第 1 集　正保国絵図及び関連資料，165 pp，榕樹書林，沖縄

沖縄県教育委員会（1993）琉球国絵図史料集　第 2 集　元禄国絵図及び関連資料，163 pp，榕樹書林，沖縄

沖縄県教育委員会（1994）琉球国絵図史料集　第 3 集　天保国絵図・首里古地図及び関連資料，171 pp，榕樹書林，沖縄

沖縄県総務部宮古事務所（2019）宮古概観，101 pp

小野寺淳（1995）歴史地理学 172：21–35

琉球王国（1745）球陽

砂川玄正（2001）平良市総合博物館紀要 8：1–52

（2019 年 11 月 8 日受付；2020 年 1 月 9 日受理）